
ヘイト・ブラッド

中二病 番号 20000

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘイト・ブラッド

【ZINEID】

Z2485U

【作者名】

中一病 番号 20000

【あらすじ】

雷が鳴る。雨は降り注ぎ、アスファルトを濡らす。誰もが寝静まる午前一時、高架線の下を一人の男女が歩く。ただ、一言も言葉を発さずに・・・

『私立 桐明寺高校』を中心とした

『ヴァンパイア事件』

警察も、動いてはいるものまったく犯人の尻尾はつかめないままだ
つた・・・

「 それに、私に血を吸う資格なんて・・・無いもの。」

「 血が嫌いな吸血鬼の話・・・

第一話 神 匠志 『グール』 ①

雷が鳴る。雨は降り注ぎ、アスファルトを濡らす。誰もが寝静まる午前一時、高架線の下を一人の男女が歩く。ただ、一言も言葉を発さずに・・・

地面の血溜りを横切り、彼らは今宵の獲物を凝視する。

「………………準備は出来てるわね？」

血のように赤い髪をサイドテールにして、壊滅的に目つきが悪い緑色の瞳を少年に向ける。

水色のTシャツにグレーの七部袖パーカーを着て、デニムのホットパンツを着こなす。

首には、逆さ十字のネックレスをかけ、足に履いたスニーカーと白いニーソックスは、すでに紅く染まっていた。

「………………ああ。」

匠志ただしと呼ばれた少年は、頷きもせず。ただ、目の前の目標をじっと見つめ、舌なめずりをする。

黒いジャガードカットソーに黒いテーラードジャケット、ベージュのカットパンツに、ライトブラウンのブーツをはいでいる。

アシンメトリーの黒髪は雨で濡れ、それを鬱陶しそうに手ぐしで整えた。

「お友達を殺す覚悟は出来た?」

「とっくの昔に出来てるやつ……」

そして、彼は口元を上げて笑う。

それにつられて少女も笑う。微笑んだときに見える犬歯。それは人間より一回り大きく、血を吸うのに適していた。そう、彼女は吸血鬼だ。

彼らの眼前には、一人の吸血鬼が食事をしていた。

浮浪者のような格好をしたそれは、下品に血を撒き散らし、人間の残骸を貪り食っていた。

そこまで、ランクの高い吸血鬼ではないのだろう。

「やつ……召し上がり。」

刹那、少年が駆ける。両手を広げ、吸血鬼に飛び掛った。指を相手の首にかけ、そのまま食い込ませる。

吸血鬼がようやく襲われたことに気づいた時には、すでに遅かった。

彼の指は、首の肉をえぐり頸動脈えもいと引きちぎる。無論、吸血鬼がその程度で死ぬことはない。

連中を殺すには、日光に当てるか、再生不可能なほど頭部を破壊するほかない。

間髪いれずに、頭部に少年の拳が振り下ろされる。頭蓋骨にひびをいれ、そこから血の噴水が湧き出る。しかし、同時に吸血鬼は少年を突き飛ばし、距離をとることができた。

「キセイマ、ナニものダ？！」

再生をしながら、吸血鬼が問う。

少年は、質問に答えることもせず。再び駆けた。

「ク、クるなアアアア！！」

少年に怯えながら、吸血鬼は詠唱をはじめる。

「われば地を這い 壁を立て 穿つ者はあらず 我を守護せ
『クレイウォール』！」

突如、少年の前に土で出来た壁が幾重にも召還される。

だが、そんなものは妨害にすらならなかつた。いかにも簡単そうに、壁を破りながら、一向にスピードを緩めず近づいていく。

最後の壁をぶち破り、絶望の表情を浮かべる吸血鬼の前に少年が立ちふさがつた。

「すいぶん、往生際が悪いじゃねえか。『立派に魔術なんか使いやがつて。』

少年は、じりじりと詰め寄り、吸血鬼の首を締め上げる。

「キさくマ・・・！ 吸血鬼であるこのオレに対しテ！ 人間風情ガ！」

「テメエみてエな、クソッタレが吸血鬼なんてたいそうな種族名、名乗るんじゃねえ。化け物で充分だ。」

「なんだトー言葉を慎メ！」

汚らしい、唾液と血を飛ばしながら、吸血鬼は怒り狂う。
己の種族に誇りを持つ『吸血鬼』にとって、『化け物』といわれる
ことほど屈辱的なことはない。

「あつそ、そんなことはどうでもいい。それより、まだ質問に答えてなかつたな。教えてやるよ。」

首を締め上げる両手に力がこもる。

彼の右手が異形をなす。手のひらは裂けそこから鋭い牙と底なしの口が現れる。腕は黒く変色し、肥大していく。
肥大とともに硬質化していく右腕は、もはや腕とは呼べず。獰猛な犬の顔が出来上がっていた。

「ケルベロス 第一首 解禁」

少年がつぶやくと同時に、『右腕の猛犬』は吠えた。

その咆哮は、鈍い響きを持ち、聞く者を震え上がらせた。

悲鳴を上げ、暴れまわる吸血鬼に、笑みを浮かべ。少年は語りかけた。

「俺の種族はな
『グール』っていうんだよ。」

『ケルベロス』は敗北者きゆううけつきに頭から齧り付いた。

少年は、肉塊を頬張り飲み込む。服を血と雨でぬらし、近くの人の残骸にも手を伸ばす。

一言も声を発せず。ただひたすら、喰らこつぐ。

少年が立ち上がつたとき、そこには骨のひとかけらも残つていなかつた。

「……エレン。人は来ていいないな？」

エレンと呼ばれた少女は、軽くうなづいた。

「いいのか？血は吸わなくて。

「ええ・・・いらない。血は嫌い。大嫌い。」

「……………疾るぞ。」

「…………そうね。しっかり捕まつてなさい。」

彼女はそう言ひついで、背中から黒い炎が噴出し、一対の翼を構築した。蝙蝠のようなそれは、直接背中には付いておらず。単に召喚されたものだ。

「……大丈夫だ。
おまえ 貞乳女は、しがみつきやすいからな。」

「ツー、うつせいわね！失血死するほど吸つてやるうかしら……」「さつきと言つてることが矛盾してゐるじゃねえか。つーか、もう死んでるんだから無理だつつの。」

溜息をつきながら グール 少年は ジュウケツキ 少女にしがみつき、二人は飛び去つていった。

『それでは、お昼のニュースをお伝えします。昨夜未明、東京都在住 宮坂 恵理子さんが失踪。

今朝、捜索願が出されました。警察は、一連のヴァンパイア事件と見て捜査を続けております。』

「なあ、聞いたか？宮坂の姉さん、昨日から家に帰つてこないらしい？」

「ああ、知ってる。知ってる。今日、富坂の旦が死んでたぜ。」

「なあ、今から富坂見に行かねえ？」

「やめとけって、さすがにそれはかわいそりだつて。」

『私立 桐明寺高校』^{きりりめいじ}

所謂、進学校と呼ばれる類の学園であり、大学進学のため日々勉強する学校である。

もつとも、『自由』がモットーの桐明寺高校では、宿題が出る」とはほとんど無く、全て生徒の自習に任せている。

その食堂では、天井に取り付けられたテレビを見たり、そこまで美味しい学食を食べる生徒でじつた返していた。

「富坂だつたら校長室入つてつたぜ。なんか警察も一緒にだつたし。」

「えーー・マジで!?.ヤベーハーん!」

「まあ、俺らが首突つ込む問題じゃないよね・・・」

「いやー、気になるわー。」

「だよなー。」

「ヴァンパイア事件・・・なんかやばそうだな・・・」

「ま、オレらが話しても別に富川の姉さんが帰つてくるわけでもねえんだし。とつとつ飯食つちゃおうぜ。」

「だな。」

「……で、仕事のほうはどうなつた？ エレン＝セペ＝アルカ
ード。」

「平氣よ。犠牲者は一人出たけど、予想の範疇だつたわ。匡志も頑張つてくれたわけだし・・・そろそろ報酬の話がしたいのだけれど。」

「

ソファーに腰を下ろし、両者は話を続ける。
エレンの向かいには、尊大な態度の老婆が座っている。短めの白髪を持ち、上から下まで黒一色の服を着ている。
人によつては、喪中か何かと勘違いされそうなものだ。

「匡志・・・ああ、あのグールのガキか・・・お前が眷属さかきにしたときは、まだ8歳の子供だったな・・・名字のほうは『榊』だったかしらね。」

「・・・ツ！」

ガタン！

エレンが机をたたき立ち上がる。

「私の前でその話をするなツ！」

怒鳴るエレンを見て、老婆は眉をひそめた。

「私の前でその話をするな？ばかばかしい。そもそも原因は、お前の身勝手極まりない行動じゃないか。」

「うひゃーーー！・・・・もつといわ・・・で、報酬は？」

そういわれると、老婆は落ち着いた表情で小さく黒いトランクを取り出し、あける。

その中には、一万円の札束が敷き詰められた。

「現金が1千万、それと輸血用の血液だ。もう保存期間は過ぎているが、腹を壊すことは無いだろう。」「

「ありがとう。現金はいただいていくけど・・・血液のほうはいら
ないわ。」

「やはりな・・・だが、それで大丈夫なのか？」

「私をそんじょそこらの 三流吸血鬼と同じにしないで。それに

「

それに、私に血を吸う資格なんて・・・

「無いもの。」

第一話 神 匠志 『グール』 ①（後書き）

作者コメント

このたびは、『ヘイト・ブランド』をお読みいただき、まことに有難うございました。

この物語は、桐明寺高校を中心に基本シリアスたまにギャグ（作者の気分で完全ギャグになつたりする）といった感じで執筆していきます。

ちなみに、作者はモチベーションしだいで毎日更新するときもあれば突然1ヶ月ほど、更新が止まつたりと、かなりの気分屋なのでその点はご了承ください。

では次の創作意欲が沸く頃にノシ

第一話 神 匠志 『グール』 : 2

四月下旬の晴れの日、冬に比べればだいぶ日も長くなり夕日が差し込む夕方、

午後6時の裏路地。

不良の溜り場である道を、桐明寺の制服を着た少女がとぼとぼ歩いていた。

「よお。富坂ちやん~」

突然話しかけられ、富坂と呼ばれた少女は硬直する。

「ど、どうも……滝山さん……」

一キビだらけの薄汚い顔で満面の笑みを作り、滝山という不良は、富坂に顔を近づけた。

「突然で悪いけどさ、今日の『お友達料』もうつてないんだけど。」

『お友達料』

その言葉を聴いた瞬間、富坂の顔がこわばる。

「富坂ちゃん、桐明寺行つてるんでしょ？ お金持ちはなんどううねだからね、いつもみたいにお友達としてお金くんない？」

言つ終わる前に、富坂は地面に頭をこすりつけた。

「「じめんなさい。おねえちゃんが家出しちゃって、家族中がてんてこ舞いで、

お金を持つてくる余裕なんて無かつたんですー。」

「……ハアアアア～？」

滝山の足が富坂の頭を蹴りつける。

「そんなこと知るわけねえだらうが！ いいからとっとと金払えやボケー！」

「ハグハ・・・ハグハ・・・」

「「じめんなさい。おねえちゃんが金だせつてんのが聞こえねえのか！」

「「じめんなさい。おねえちゃんがよおー。」

「耳も聞けねえのか、いのくそアマガよおー。」

滝山が暴行を続ける。富坂は頭から血を流しその場に倒れこんだ。

「「じめんなさい。おねえちゃんがよおー。」

「・・・チツ」

倒れた富坂に痰を吐き、長い髪の毛を引っ張りまくり度田を殴わせた。

「じゅあー、今日またや。今日だけは勘弁してあげる。」

「本当にですかー！」

予想外の発言に、富坂は心底驚いた。

「うそ、今日だけは許してあげるよ。・・・といひやが。」

「・・・はい。」

「オレ、今日『説まつてんだよなー』」

「・・・え？」

「金払えないんだろ？じゃあその代わりに犯らせりてこと、
富坂ちゃんおつぱい大きいしゃー、ちょっとぐりこ思いじやん。」

言葉の意味を理解したとき、富坂は頭が真っ白になつた。

「や、やめてくださいー。」

「ハア？お友達でもねえのに何様のつもじドロ聞こへんだよ。
おーこ、お前らもいつち来こよー。」

滝山の声と同時に数人の不良が集まつてきた。

「なんだつたりか、ここつりも説せりやおつか。」

「...お願いですーそれだけは・・・それだけはこやでー。」

「ウハセーんだよーだつたりひとと金払えやー。」

怒号に富坂の身がすべくむ。

「「めんなさい。お金だつたら……お金だつたら、明日必ず払い
ます！」

だから、それだけは……それだけは……

「あアー！？」

数人での殴る蹴るの暴行。富坂は体を亀のように丸め、耐えるしか
なかつた。全身の痛みと恐さで思考も回らなかつた。

「どうすんだよー。金払うか？それとも」「」で殴られるのかー・ビッち
なんだよー。」

「ハハ・・・・ハハ・・・・」

「なんか言えハハんだろー。」

「「めんなさい。」「めんなさい。」「めんなさい。」「めんな
さい
」「めんなさい。」「めんなさい。」「めんなさい。」「めんな
さい。」

「痛い。恐い。嫌だ。全てが「ひきや混ぜになつて、ただただ「「めん
なさい」と許しを請つ」としか出来なかつた……

嫌、もう嫌。早く家に帰つたい、誰でもいい。警察でも、通りすが
りでもなんでもいい。

誰か・・・誰か・・・

誰か助けて

「……その辺でやめとけよ。どうせ、たいした金も巻き上げてないんだろう？」

声、男の人の声だった。

痛みで目も開けられない絶体絶命のとき、誰かが助けに来ててくれた。

「何だテメホ……」ジジがどこか分かつてんのか？」

「セヒナ、少なくともボーアスカウトの集合場所には見えねーな。」

「ハア？ なめてんじゃねえぞ！」

やつとの思いで目を開ける。一人の少年が数人の不良と退治していた。

少年は物怖じせずに、声を荒げる不良たちの前で不敵な笑みを浮かべながら、

鬱陶しそうにアシンメトリーの髪を整えた。

「何しに来たかは知らねえけどよおー、団にのんじゃねえ、じばくぞ。」

「おじおじ、お前らは少し考えるつて事をしたほうがいいぜ。今のがうちに脳細胞分裂させとかねえと、一生馬鹿のままだぜ？」

「ひぬせーんだよ。オレは今こいつに用があんの正義のヒーロー気取りか知んなーけどよおー、なんか理由でもあん

のかよ？おとなしくやつしんでる。」

「・・・あんたら見てたら無性にむかついた。だから殴らせや。・・・
・「レジヤダメかい？」

言ひ終わるか、否か。滝山はその少年の胸倉を掴んだ。

「テメエ・・・さつきから聞いてりやふざけたつらして、ふざけた
事言いやがつて。
なめてんじやねえぞ」「アーッ！」

「それはまつちの台詞だ。いい加減にしねえと・・・ぶつ殺すぞ？」

少年から発せられる殺氣。それは、意識が朦朧としている富坂です
らはつきりと感じられるものだった。

『自分に向けられたものではない』そんなことぐらこぢゃんと分か
る。

でも、恐くて恐くて仕方が無い。動悸が激しくなる。鳥肌が立ち、
指一本動かすことすら出来なかつた。

もし、今この場で少年に立ち向かうとこいつのなり、それはよほど腕
に覚えがあるか

ただの馬鹿だ。

あいにく、滝山は馬鹿に分類された。

「畜生があーー！」

大振りなパンチを少年に向けて繰り出す。

多少、運動神経がよければ素人でも避けられそつなものも、まったく
無駄の無い動きで受け流し、

少年は滝山を蹴り飛ばした。

「…………があツ」

おおよそ、2メートル宙に浮いた滝山は、小さい悲鳴を上げて地面とキスをする羽目になった。

自分たちのリーダーを失った不良たちは、一団散に逃げ出して、何人もの不良たちが集まっていた裏路地は、もう少年と富坂しか残つていなかつた。

「おい、大丈夫か？」

富坂の身を案じてか、少年は富坂に近づいた。

「……はい、大丈夫です……」めんなさい。」

富坂は消え入りそうな声をだし、少年を見上げた。
特に美少年というわけではないが、整つた顔立ちをしている。
アシンメトリーの黒髪を、再び鬱陶しそうに整えた。

「助けてくださつて、ありがとうございます。えっと……」

「 匡志。 榊 匡志だ。」

「はい、榊さん。今日はありがとうございました。わたし、桐明寺高校の富坂 楓です。」

「なるほど、桐明寺か……実は、明日そこへ転校する」とになつてゐるんだ。」

「あ、あした?!だ……誰がですか?」

「いや、話の流れ的に俺だ。」

「そ、そうですね……」「めんなさー。」

「オジギンカのよつこ頭を下げる宮坂を見て、榊はクスリと笑った。
「とにかく、連中が待ち伏せしている可能性もある。家まで送りうつか
？」

「は、はー。」「めんなさー……

「それと、そのすぐ」「めんなさーって言ひ癖。直したほうがいいで
？」

「はー・・・」「めんなさー。」

「・・・・・・・・・・ハア・・・・

やれやれ、とでもいう風に頭をボリボリかきながら早足で歩く榊を、
置いてかれなによつに宮坂が追いかけた。
もつすでに、夕日は落ちていた。

第一話 神 匠志 『グール』 ②(後書き)

ネット環境がないところへ引越ししたため
1ヶ月ほど更新できません。迷惑おかけします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2485u/>

ヘイト・ブラッド

2011年10月9日07時52分発行